

金
槐
和
歌
集
本文及び総索引

本
文
篇

春

正月一日よめる

1 けさ見れば山もかすみてひさかたの あまのはらよりはるはきにけり
立春の心をよめる

2 こゝのへのくもるにはるぞたちぬらし 大内山にかすみたなびく

故郷立春（一七）

3 あさがすみたてるを見ればみづのえの よしのゝ宮に春はきにけり
はるのはじめにゆきのふるをよめる

4 かきくらし猶ふる雪のさむければ はるともしらぬたにのうぐひす

5 春たゝばわかなつまむとしめをきし のべとも見えずゆきのふれゝば
はるのはじめのうた

6 うちなびきはるさりくればひさきおふる かた山かげにうぐひすぞなく

7 山ざとにいへるはすべしうぐひすの なくはつこゑのきかまほしきに

屏風のゑにかすがの山にゆきふれる

所をよめる

8 松の葉のしろきを見ればかすが山 このめもはるのゆきぞふりける」22

わかなつむところ

9 かすがのゝとおひのゝもりけふとてや むかしがたみにわかなつむらむ

雪中わかなといふことを

10 わかなつむころもでぬれてかたをかの あしたのはらにあはゆきぞふる

むめのはなをよめる

11 むめがえにこほれるしもやとけぬらむ ほしあへぬつゆのはなにこぼるゝ」

屏風にむめの木にゆきふりかゝれる

12 むめの花いろはそれともわかぬまで かせにみだれてゆきはふりつゝ

むめのはなさける所をよめる

13 わがやどのむめのはつ花さきにけり まつうぐひすはなかきなかぬ

花あひだのうぐひすといふことを

14 はるくればまづさくやどのむめのはな」(3) かをなつかしみうぐひすぞなく

むめの花かせにほふといふことを

人くによませ侍しついでに

15 むめがをゆめのまくらにさそひきて さむるまちけるはるのやまかせ

16 このねぬるあさけのかせにかほるなり のきばのむめのはるのはつ花

梅香薰衣

17 むめがはわがころもでにほひきぬ 花よりすぐるはるのはつかせ

むめのはなをよめる

18 はるかぜはふけどふかねどむめのはな さけるあたりはしるくぞありける

はるのうた

19 さわらびのもえいつるはるになりぬれば のべのかすみもたなびきにけり」(4)

かすみをよめる

20 みふゆつきはるしきぬればあをやぎの かづらぎやまにかすみたなびく

21 おほかたにはるのきぬれば春がすみ よもの山べにたちみちにけり

22 をしなべて春はきにけりつくばねの このもとごとにかすみたなびく

やなぎをよめる」

23 はるくればなをいろまさる山しろの ときはのもりのあをやぎのいと

あめの中やなぎといふことを

24 あさみどりそめてかけたるあをやぎの いとにたまぬく春さめぞふる

25 水たまるいけのつよみのさしやなぎ このはるさめにもえいでにけり

やなぎ」(5)

26 あをやぎのいともてぬけるしらつゆの たまこきちらすはるのやまかせ

あめそほふれるあした勝長壽院の

むめ所くさきたるをみて花にむすび

つけしうた

27 ふるでらのくち木のむめもはるさめに そぼちて花ぞほころびにける

雨後うぐひすといふことを」

28 はるさめのつゆもまだひぬむめがえに うはげしほれてうぐひすぞなく

梅花厭雨

29 わがやどのむめのはなさけりはるさめは いたくなふりそちらまくもぞし

故郷梅花

30 たれにかもむかしもとはむふるさとの のきばのむめは春をこそしれ

31 としふればやどはあれにけりむめの花（さくら） 花はむかしのかにとほへども

32 ふるさとにたれしのべとかむめのはな むかしわすれぬかにとほふらむ

ふるさとの春の月といふことをよめる

33 ふるさとはみしごともあるはずあれにけり かげぞむかしの春のよの月

34 たれすみてたれながむらむふるさとの よしのとみやの春のよの月

春月

35 ながむればころもでかすむひさかたの 月のみやこのはるのよのそら

梅花をよめる

36 わがやどのやへのこうばいさきにけり しるもしらぬもなべてとはなむ

37 うぐひすはいたくなわびそむめのはな ことしのみちるならひならねばうぐひす

38 さりとちとおもひしほどにむめのはな ちりすぐるまできみがきまさぬ

39 わがそでにかをだにのこせむめのはな あかでちりぬるわすれがたみに

40 むめのはなきけるさかりをめのまへに すぐせるやどははるぞすくなき

よぶこどりの

41 あそによしならの山なるよぶこどり いたくなときそ君もこなくに「

すみれ

42 あさぢはらゆくゑもしらぬのべにいでよ ふるさと人はすみれつみけり

きんす

43 たかまどのおのへのきんすあさなく つまにこひつとなくねかなしも

44 をのがつまこひわびにけりはるのよに あさるきんすのあさなくなくあさる

名所楼

45 をとにきくよしのよまへらまきにけり 山のふもとにかゝるしらくも

とぎま丘のさへい

46 かづらきやたかまのさくらながむれば ゆふるるくもに春さめぞふる

雨中桜

47 あめふるとたちかくるれば山ざくら「はなのしづくにそぼちぬるかな

48 けふも又花にくらしつはるさめの つゆのやどりをわれにかさなん

山路夕花

49 みちとをみけふこえくれぬやまざくら はなのやどりをわれにかさなむ

春山月「97」

50 かぜさはぐをちのとやまにそらはれて さくらにくもる春のよの月

屏風ゑにたび人あまた花のした

にふせる所

51 このもとの花のしたぶしよごろへて わがころもでに月ぞなれぬる

52 このもとにやどりはすべしさくらばな ちらまくおしみたびならなくに「

53 このもとにやどりをすればかたしきの わがころもでにはなはちりつゝ

54 いましはと思しほどにさくらばな ちるこのもとにひかずへぬべし

山家見花ところ

55 時のまと思てこしをやまぎとに はな見るくとながめしぬべし

花ちれる所にかりのとぶを」(10)

56 かりがねのかへるつばさにかほるなり はなをうらむる春のやまかせ

きさらぎの廿日あまりのほどにやあり

けむきたむきのえんにたちいでゆふ

ぐれのそらをながめて一人おるにかり

のなくをきよてよめる

57 ながめつゝおもふもかなしかへるかり ゆくらむかたのゆふぐれのそら」

ゆみあそびをせしによしの山の

かたをつくりて山人のはなみたる

所をよめる

58 みよしのゝやまの山もりはなをよみ ながくし日をあかずもあるかな

59 みよしのゝ山にいりけむやま人と なりみてしがなはなにあくやと

屏風によしのやまかきたる所」(11)

60 みよしのゝやまにこもりし山人や 花をばやどのものと見るらん

古郷花

61 さとはあれぬしがの花ぞのくかみの むかしのはるやこひしかるらむ

62 たづねてもたれにかとははむふるさとの はなもむかしのあるじならねば

花をよめる」

63 さくらばなちらまくをしみうちひさす みやぢの人ぞまどるせりける

64 さくら花ちらばおしけむたまほこの みちゆきぶりにをりてかざむ

65 みちすがらちりかふはなを雪とみて やすらふほどにこの日くらしつ

66 さけばかつうつるふ山のさくらばな 花のあたりにかせなふきそも」(12)

人のもとによみてつかはし侍し

67 はるはくれど人もすさめぬ山ざくら かぜのたよりにわれのみぞとふ

山家見花といふことを人くあまた

つかうまつりしついでに

68 さくら花さきちるみればやまざとに われぞおほくのはるはへにける

屏風に山中にさくらさきたる所

69 山ざくらちらばちらなむおしげなみ よしや人みず花のなだてに

はなをたづぬといふことを

70 はなを見むとしもおもはでこしわれぞ ふかきやまぢに日かずへにける

屏風のゑに

71 山かせのさくらふきまくをとすなり よしのゝたきのいはもとゞろに」13

72 たきのうへのみふねの山のやまざくら かせにうきてぞはなもちりける

ちる花

73 はるくればいとかのやまの山ざくら かせにみだれて花ぞちりける

花かせをいとふ

74 さきにけりながらの山のさくらばな かせにしられで春もすぎなん

花をよめる」

75 みよしのゝやましたかげのさくらばな さきてたてりとかせにしらすな

名所ちる花

76 さくらばなうつろふ時はみよしのゝ やましたかぜにゆきぞふりける

花雪にゝたりといふことを

77 かぜふけば花はゆきとぞちりまがふ よしのゝ山は春やなからむ〔14〕

78 山ふかみたづねてきつるこのもとに ゆきと見るまではなぞちりける

79 春のきて雪はきえにしこのもとに しらくもはなのちりつもるかな

雨中夕花

80 山ざくらいまはのころのはなのえに ゆふべのあめのつゆぞこぼるゝ

81 やまざくらあだにちりにし花のえに「ゆふべのあめのつゆのゝこれる

落花をよめる

82 はるふかみあらしのやまのさくらばな さくと見しまにちりにけるかな

三月のすゑつかた勝長壽院にまう

でたりしにあるそう山かげにかくれ

をるを見てはなはとゝひしかばちりぬ

となむこたへ侍しをきゝてよめる

83 ゆきて見むと思しほどにちりにけり〔15〕 あやなのはなやかぜたゝぬまに

84 さくら花さくと見しまにちりにけり ゆめかうつゝか春のやまかせ

水邊落花といふ事を

85 さくらばなちりかひかすむはるのよのおぼる月よのかものかはかせ

86 ゆく水にかぜふきいるゝさくらばなながれてきえぬあはかともみゆ〔

87 山ざくらきゞのこずゑにみしものをいはまのみづのあはとなりぬる

湖邊落花

88 やまかせのかすみふきまきちる花のみだれてみゆるしがのうらなみ

故郷惜花心を

89 さゝなみやしがのみやこのはなざかり かせよりさきにとはましものを〔16〕

90 ちりぬればとふ人もなしふるさと花ぞむかしのあるじなりける

91 ことしさへとはれでくれぬさくらばな はるもむなしきなにかそありけれ

花恨風

92 心うきかせにもあるかなさくらばな さくほどもなくちりぬべらなる

春風をよめる」

93 さくらばなまきてむなしくちりにけり よしのゝやまはたゞ春のかぜ

さくらをよめる

94 さくらばなさけるやまぢやとをからん すぎがてにのみはるのくれぬる

95 はるふかみ花ちりかゝる山の井の ふるきしみづにかはづなくなり

河邊款冬」(廿七)

96 山ぶきのはなのしづくにそでぬれて むかしおぼゆるたまがはのさと

97 やまぶきのはなのさかりになりぬれば 井でのわたりにゆかぬ日ぞなき

款冬を見てよめる

98 わがやどのやへの山ぶきつゆをゝもみ うちはらふそでのそぼちぬるかな

あめのふれる日山ぶきをよめる」

99 はるさめのつゆのやどりをふくかせに こぼれてにほふ山ぶきのはな

山ぶきをゝりてよめる

100 いまいくか春しなければはるさめに ぬるともおらむ山ぶきのはな

山ぶきに風のふくを見て

101 わが心いかにせよとかやまぶきの うつろふはなにあらしたつらん」(18)

102 たちかへりみれどもあかずやまぶきの はなちるきしのはるのかはなみ

やまぶきのはなをくりて人のもとに

つかはすとてよめる

103 をのづからあはれとも見よはるふかみ ちりゐるきしのやまぶきのはな

104 ちりのこるきしの山ぶきはるふかみ このひとえだをあはれといはなん」

山ぶきのちるを見て

105 たまもかる井でのかはかせふきにけり みなはにかお山ぶきのはな

106 たまもかる井でのしがらみ春かけて さくやかはせの山ぶきの花

まとゆみのふりうに大井がはを

つくりてまつにふぢかゝる所

107 たちかへりみてをわたらむ大井がは かはべのまつにかゝるふぢなみ」(19)

屏風ゑにたこのうらにたび人のふち

のはなをくりたる所

108 たこのうらのきしのふぢなみたちかへり おらではゆかじそではぬるとも

いけのへんのふぢのはな

109 ふるざとのいけのふぢなみたれうへて むかしわすれぬかたみなるらん

110 いとはやもくれぬる春かわがやどの いけのふぢなみうつろはぬまに」

正月二ありしとし三月にほとゝぎす

なくをきゝてよめる

111 きかざりきやよひの山のほとゝぎす はるくはゝれるとしはありしかど

春のくれをよめる

112 春ふかみあらしもいたくふくやどは ちりのこるべきはなもなきかな

113 ながめこしはなもむなしくちりはてゝ はかなくはるのくれにけるかな」(20)

114 いづかたにゆきかくるらむはるがすみ たちいでゝ山のはにも見えなで

115 ゆく春のかたみとおもふをあまつそら ありあけの月はかげもたえにき

三月盡

116 おしむともこよひあけなばあすよりは はなのたもとをぬぎやかへてむ「

夏

更衣をよめる

117 おしみこし花のたもとぬぎかへつ 人の心ぞなつにはありける

夏のはじめのうた

118 なつごろもたつたの山のはととぎす いつしかなかむこゑをきかばや

119 春すぎていくかもあらねどわがやどの「いけのふちなみうつろひにけり

ほととぎすをまつといふことをよめる

120 夏ごろもたちし時よりあしびきの 山ほととぎすまたぬ日ぞなき

121 ほととぎすきくとはなしにたけくまの まつにぞ夏のひかすへぬべき

122 はつこゑをきくとはなしにけふも又 やまほととぎすまたずしもあらず（22）

123 ほととぎすかならずまつとなけれども よなくめをもさましつるかな

山家時鳥

124 やまちかくいゑるしせればほととぎす なくはつこゑはわれのみぞきく

ほととぎす哥

125 あしびきのやまほととぎすこがくれて めにこそ見えねおとのさやけさ

126 かづらきやたかまの山のほととぎす くもゑのよそになきわたるなり

127 あしびきのやまほととぎすみやまいでよぶかき月のかげになくなり

128 ありあけの月はいりぬるこのまより やまほととぎすなきていづなり

129 みな人のなをしもよぶかほととぎす なくなるこゑのさとをとよむか（23）

夕時鳥

130 ゆふやみのたづくしきにほととぎす こゑうらがなしみちやまどへる

夏哥

131 さつきまつをだのますらおいとまなみ せきいるゝみづにかはづなくなり

132 さみだれに水まさるらしあやめぐさ うれはかくれてかる人のなき」

五月あめふれるにあやめぐさを

みてよめる

133 そでぬれてけふゝくやどのあやめぐさ いづれのぬまにたれかひきけむ

134 五月雨は心あらなむくもまより いでくる月をまてばくるしも

135 さみだれに夜のふけゆけばほとゝぎす ひとりやまべをなきてすぐなり」24

136 さみだれのつゆもまだひぬおくやまの まきのはがくれなくほとゝぎす

137 五月雨のくものかゝれるまきもくの ひはらがみねになくほとゝぎす

138 さ月山こだかきみねのほとゝぎす たそかれ時のそらになくなり

故郷盧橘」

139 いにしへをしのぶとなしにふるさとの ゆふべのあめにゝほふたちはな

盧橘薫衣

140 うたゝねのよるのころもにかはるなり ものおもふやどのゝきのたちばな

ほととぎすをよめる

141 ほととぎすきけどもあかずちちばなの 花ちるさとのさみだれのころ」(26)

社頭時鳥

142 さみだれをぬさにたむけてみくまのゝ 山ほととぎすなきとよむなり

雨いたくふれるよひとりほととぎす

をきゝてよめる

143 ほととぎすなくこゑあやなさ月やみ きく人なしみあめはふりつゝ」

深夜郭公

144 さ月やみおぼつかなきにほととぎす ふかきみねよりなきていづなり

145 さつきやみかみなびやまのほととぎす つまこひすらしくねかなしも

蓮露似玉

146 さよふけてはすのうきはのつゆのうへに たまと見るまでやどる月かげ」(26)

河風似秋

147 いはくゞるみづにや秋のたつたがは かはかせずし夏のゆふぐれ

螢火乱飛秋已近といふ事を

148 かきつばたおふるさはべにとぶほたる かずこそまされ秋やちかけむ

149 夏やまになくなるせみのこがくれて 秋ちかしとやこゑもおしまぬ」

みな月の廿日あまりのころ夕風

すだれをうごかすをよめる

150 秋ちかくなるしるしにやたまだれの こすのまとをしかせのすゞしき

夜風冷衣といふことを

151 なつふかみ思もかけぬうたゝねの よるのころもにあきかせぞふく

夏のくれによめる」27

152 昨日まで花のちるをぞおしみこし ゆめかうつゝか夏もくれにけり

153 みそぎするかはせにくれぬ夏の日の いりあひのかねのそのこゑにより

154 夏はたゞこよひばかりと思ねの ゆめちにすゞし秋のはつ風」

秋

七月一日のおしたによめる

155 きのふこそ夏はくれしかあきといでの ころもでさむし秋のはつかぜ

海遍秋きたるといふ心を

156 きりたちてあきこそくらにきにけらし ぶきあげのはまのうらのしほかせ〔28〕

157 うちへて秋はきにけりきのくにや ゆらのみさきのおまのうけなは

寒蟬鳴

158 ふくかぜのすらくもあるかをのづから 山のせみなきて秋はきにけり

秋のはじめのうた

159 すむ人もなきやどなれどおぎのはの つゆをたづねてあきはきにけり〔

160 のとなりてあととはたえにしふかくさの つゆのやどりに秋はきにけり

白露

161 秋はくやきにける物をおほかたの のにも山にもつゆぞをくなる

秋風

162 ゆふさればころもですゞしたかまとの おのへのみやの秋のはつ風〔29〕

163 ながむればころもでさむしゆふづくよ さほのかはらの秋のはづかせ

秋のはじめによめる

164 あまのがはみなはさかまきゆく水の はやくもあきのたちけるかな

165 ひさかたのあまのかはらをうちながめ いつかとまちし秋もきにけり

166 ひこぼしのゆきあひをまつひさかたの「あまのかはらに秋風ぞふく

167 ゆふされば秋かせすゞしたなばたの あまのはごろもたちやかふらん

七夕

168 あまのがはきりたちわたるひこぼしの つまむかへぶねはやもこがなん

169 こひく／＼てまれにあふよのあまのがは かはせのたづはなかずもあらなむ〔30〕

170 たなばたのわかれをくしみあまのがは やすのわたりにたづもなかなん

171 いまはしもわかれもすらししたなばたは あまのかはらにたづぞなくなる

秋のはじめ月あかゝりしよ

172 あまのはらくもなきよるにひさかたの 月さえわたるかさゝぎのはし

173 秋かぜによのふけゆけばひさかたの「 あまのかはらに月かたぶきぬ

七月十四日夜勝長壽院のらうに

侍りて月のさしいりたりしをよめる

174 ながめやるのきのしのぶのつゆのまに いたくなふけそ秋のよの月

あけぼのにはのおぎをみて

175 あさばらけおぎのうへふく秋風に したばをしなみつゆぞこぼるゝ」(31)

秋のゝにおくしらつゆはたまなれや

といふことを人ゝにおほせてつかう

まつらせし時よめる

176 さゝがにのたまぬくいとのをゝよはみ かせにみだれてつゆぞこぼるゝ

秋哥

177 花にをくつゆをしづけみしらすげの まのゝはきはらしほれあひにけり

路頭萩

178 みちのべのおのゝゆふぎりたちかへり 見てこそゆかめ秋はぎのはな

草花をよめる

179 のべにいでゝそぼちにけりなからごろも きつゝわけゆく花のしづくに

180 ふちばかまきてぬぎかけしぬしやたれ とへどこたへずのべの秋風」(32)

とがりしにとがみがはらといふ所にいで

侍し時あれたるいほりのまへにらんさ

けるをみてよめる

181 秋かぜになにゝほふらむふちばかま ぬしはふりにしやどしらすや

故郷萩

182 ふるざとのもとあらのこはぎいたづらに 見る人なしみさきかちりなん」

にはのはぎをよめる

183 秋風はいたくなふきそわがやどの もとあらのこはぎちりまくもおし

夕秋風といふことを

184 秋ならでたゞおほかたのかぜをとも ゆふべはことになしきものを

ゆふべの心をよめる

185 おほかたにも所思としもなかりけり たゞわがための秋のゆふぐれ〔33〕

186 たそがれにも所思をればわがやどの おぎのはそよぎ秋かせぞふく

187 われのみやわびしとはおもふはなすゝき ほにいづるやどの秋のゆふぐれ

にはのはぎわづかにのこれるを月さし

いでゝのち見るにちりにたるにや花

のみえざりしかば

188 はぎのはなくれゝまでもありつるが「月いでゝ見るになぎがはかなさ

秋をよめる

189 秋はぎのしたはもいまだうつろはぬに けさふくかせはたもとさむしも

あさがほ

190 かせをまつくきのはにをくつゆよりも あだなる物はあさがほの花

のべのかるかやをよめる〔34〕

191 ゆふさればのちのかるかやうちなびき みだれてのみぞつゆもをきける

秋哥

192 あさなくつゆにおれふす秋はぎのはなふみしだきしかぞなくなる

193 はぎが花うつろひゆけばたかさごのおのへのしかのなかぬひぞなき」

194 さをしかのをのがすむのゝをみなへし はなにあかずとねをやなくらむ

195 よそに見ておらではすぎじをみなへし なをむつまじみつゆにぬるとも

196 秋かせはあやなくふきそしらつゆの あだなるのべのくずのはのうへに

197 しらつゆのあだにもをくかくずのはに たまればきえぬかせたゝぬまに」352

198 きりくすなくゆふぐれの秋かせに われさへあやなものぞかなしき

山家晩望といふことを

199 くれかゝるゆふべのそらをながむれば こだかき山に秋かせぞふく

200 秋をへてしのびもかねにもぞ思 をのゝやまへのゆふぐれのそら」

201 こゑたかみはやしにさけぶさるよりも われどものおもふ秋のゆふべは

秋のうた

202 たまだれのこすのひまもる秋かぜの いもこひしらに身にぞしみける

203 あきかぜはやゝはださむくなりけり」36c ひとりやねなむながきこのよを

204 かりなきて秋風さむくなりけり ひとりやねなんよるのころもうすし

205 をぎゝはら夜はにつゆふく秋風を やゝさむしとやむしのわぶらむ

206 秋ふかみつゆさむき夜のきりぐす たゞいたづらにねをのみぞなく

207 にはくさにつゆのかずそふむらさめに よぶかきむしのこゑぞかなしき」

208 あさちはらつゆしげきにはのきりぐす 秋ふかきよの月になくなり

209 あきのよの月のみやこのきりぐす なくはむかしのかげやこひしき

210 あまのはらふりさけ見れば月きよみ 秋のよいたくふけにけるかな

月をよめる

211 われながらおほえずをくかそでのつゆ 月にも所思よごろへぬれば」37c

八月十五夜

212 ひさかたの月のひかりしきよければ 秋のなかばをそらにするかな

海邊月

- 213 たまさかに見るものにもがいせのうみの きよきなぎさの秋のよの月
 214 いせのうみやなみにたけたる秋のよの ありあけの月にまつかせぞふく」
 215 すまのあまのそでふきかへす秋かせに うらみてふくる秋のよの月
 216 しほがまのうらふくかせにあきたけて まがきのしまに月かたぶきぬ

月前鴈

- 217 あまのはらふりさけ見ればますかゞみ きよき月よにかりなきわたる
 218 むばたまの夜はふけぬらしかりがねの きこゆるそらに月かたぶきぬ」38
 219 なきわたるかりのはかせにくもきえて よぶかきそらにすめる月かげ
 220 こゝのへのくもをわけてひさかたの 月のみやこにかりぞなくなる
 221 あまのとをあけがたのそらになくかりの つばさのつゆにやどる月かげ
 海のほとりをすぐとてよめる

- 222 わたのはらやへのしほぢにとぶかりの つばさのなみにあきかせぞふく」
 223 ながめやる心もたえぬわたのはら やへのしほぢの秋のゆふぐれ

鴈を

224 秋風に山とびこゆるはつかりの つばぎにわくるみねのしらくも

225 あしびきのやまとびこゆる秋のかり いくへのきりをしのぎぬらむ

226 かりがねはともまどはせりしがらきや まきのそま山きりたゝるらし」(39)

夕鴈

227 ゆふざればいなばのなびくあきかせに そらとぶかりのこゑもかなしや

田家夕鴈

228 かりのゐるかどたのいなばうちそよぎ たそがれ時に秋かせぞふく

野邊露

229 ひさかたのあまとぶかりのなみだかも」 おほあらしきのなきながうへのつゆ

田家露

230 秋たもるいほにかたしくわがそでに きえあへぬつゆのいくへをきけむ

田家夕

231 かくて猶たえてしあらばいかゞせん 山だもるいほの秋のゆふぐれ

田家秋といふ事を」(40)

332 からごろもいなばのつゆにそでぬれて ものおもへともなれるわが身か

233 山だもるいほにしをればあさなく たえずきつるさをしかのこゑ

夕鹿

234 なくしかのこゑよりそでにをくかつゆ もの思ころの秋のゆふぐれ

しかをよめる

235 つまこふるしかぞなくなるをぐらやま「やまのゆふぎりたちにけむかも

236 ゆふざればきりたちくらしをぐら山 山のとかげにしかぞなくなる

237 くものゐることゑはるかにきりこめて たかしのやまにしかぞなくなる

238 さよふくるまゝにとやまのこのまより さそふか月をひとりなくしか

239 月をのみあはれと思をさよふけて みやまがくれにしかぞなくなる」(41)

閑居望月

240 こけのいほにひとりながめてとしもへぬ ともなき山の秋のよの月

名所秋月

241 月みればころもできむしさらしなや をはすてやまのみねの秋かぜ

242 山さむみ衣でうすしさらしなや をばすての月に秋ふけしかば」

243 さゝなみやひらのやまかせさよふけて 月かげさむしゝがのからさき

秋哥

244 月きよみ秋のよいたくふけにけり さほのかはらにちどりしばなく

月前擣衣

245 あきたけてよぶかき月のかげ見れば あれたるやどころもうつなる」(42)

246 さよふけてなかばたけゆく月かげに あかでや人のころもうつらむ

247 よをながみねざめてきけばなが月の ありあけの月に衣うつなり

擣衣をよめる

248 ひとりぬるねざめにきくぞあはれなる ふしみのさとにころもうつこゑ

249 みよしのゝやましたかせのさむきよを たれふるさとにころもうつらむ」

秋哥

250 むかし思あきのねざめのとこのうへを ほのかにかよふみねのまつかせ

251 見る人もなくてちりにきしぐれのみ ふりにしさとの秋はぎのはな

252 秋はぎのむかしのつゆにそでぬれて ふるきまがきにしかぞなくなる

253 あさまだきをのゝつゆじもさむければ〔43〕 秋をつらしとしかぞなくなる

254 あきはぎのしたばのもみちうつろひぬ なが月のよのかぜのさむさに

あめのふれるよにはのきくをみてよめる

255 つゆをゝもみまがきのきくのはしもあへず はるればくもるよるのむらさめ

月夜きくの花をゝるとよめる

256 ぬれておるそでの月かげふけにけり まがきのきくのはなのうへのつゆ〔

あるそうにころもをたまふとて

257 のべ見ればつゆじもさむききりぐす よるのころものうすくやあるらん

なが月のよきりぐすのなくをきとて

よめる

258 きりぐすよはのころものうすきうへに いたくはしものをかずもあらなむ

九月霜降秋早寒といふ心を〔44〕

259 むしのねもほのかになりぬはなすゝき あきのすゑばだしもやをくらむ

秋のすゑによめる

260 かりなきてふくかせさむみたかまとの のべのあさちはいろづきにけり

261 かりなきてさむきあさけのつゆじもに やのゝかみ山いろづきにけり

名所紅葉

262 はつかりのはかせのさむくなるまゝに さほのやまべはいろづきにけり

263 かりなきてさむきあらしのふくなべに たつたのやまはいろづきにけり

かりのなくをきゝてよめる

264 けさきなくかりがねさむみから衣 たつたのやまはもみぢしぬらん

265 神な月またでしぐれやふりにけむ（あじ） みやまにふかきもみぢしにけり

さほやまのはゝそのもみぢしぐれに

ぬるといふことを人ゝによませし

ついでによめる

266 さほやまのはゝそのもみぢぢのいろに うつろふ秋はしぐれふりけり

秋哥

267 このはちる秋のやまべはうかりけり」たへでやしかのひとりなくらん

268 もみぢ葉ゝみちもなきまでちりしきぬ わがやどをとふ人しなれば

水上落葉

269 ながれゆくこのはよどむえにしあれば くれてのゝちも秋のひさしき

270 くれてゆく秋のみなとにかぶこのは あまのつりするふねかともみゆ」46

秋のすゑによめる

271 はななくてくれぬと思をゝのづから ありあけの月にあきぞのこれる

秋をゝしむといふことを

272 なが月のありあけの月のつきずのみ くるあきごとにおしきけふかな

273 としごとの秋のわかればあまたあれど けふのくるゝぞわびしかりける

九月じんの心を人々におほせてつかう」

まつらせしついでによめる

274 はつせ山けふをかぎりとながめつる いらあひのかねに秋ぞくれぬる」47

冬

十月一日よめる

275 秋はいぬかぜにこのはゝちりはてゝ 山さびしかるふゆはきにけり

まつかぜしぐれにゝたり

276 ふらぬよもふるよもまがふしぐれかな このはのゝちのみねのまつかぜ

277 神な月このはふりにし山ぎとは「しぐれにまがふまつのかぜかな

冬のうた

278 このはちり秋もくれにしかたをかの さびしきもりに冬はきにけり

279 はつしぐれふりにし日より神なびの もりのこずゑぞいろまざりゆく

280 神な月しぐれふるらしをく山は とちまのもみぢいまざかりなり」(48)

冬のはじめの哥

281 神な月しぐれふればかならやまの ならのはがしはかてにうつろふ

282 したもみぢかつはうつろふはくそはら 神な月してしぐれふれりてへ

283 みむろ山もみぢくるらし神な月 たつたのかはににしきをりかく

284 よしのがはもみぢばながるたきのうへの「みふねのやまにあらしふくらし

285 ちりつもあるこのはくちにしたにみづも ころりにとづる冬はきにけり

286 ゆふづくよきはべにたてるあしたづの なくねかなしき冬はきにけり

野霜といふことを

287 はなすくきかれたるのべにをくしもの むすぼくれつふゆはきにけり

しもをよめる「49」

288 あづまぢのみちのふゆくきかれにけり よなくしもやをきまざるらむ

289 おほさはのいけのみづくきかれにけり ながきやすがらしもやをくらむ

月かげしもにたりといふことを

よめる

290 月かげのしろきを見ればかさくぎの わたせるはしにしもぞをきにける「

冬哥

291 ゆふづくよさほのかはかせ身にしみて そでよりすぐるちどりなくなり

河邊冬月

292 ちどりなくさほのかはらの月きよみ ころもでさむしよやふけにけむ

月前松風

293 あまのはらそらをさむけみむばたまの「あま」よわたる月にまつかせぞふく

うみのへんのちどりといふことを人く

あまたつかうまつりしついでに

294 よをさむみうらのまつかせふきむせび むしあけのなみにちどりなくなり

295 ゆふづくよみつしほあひのかたをなみ なみだしほれてなくちどりかな

296 月きよみさよふけゆけばいせしまや いちしのうらにちどりなくなり「

名所ちどり

297 衣でにうらのまつかせさえわびて ふきあげの月にちどりなくなり

寒夜千鳥

298 かぜさむみよのふけゆけばいもがしま かたみのうらにちどりなくなり

ふかきよのしも

299 むばたまのいもがくろかみうちなびき〔五七〕 ふゆふかきよにしもぞをきにける

冬哥

300 かたしきのそでこそしもにむすびけれ まつよふけぬるうちのはしひめ

301 かたしきのそでもこほりぬふゆのよの あめふりすさむあか月のそら

302 夜をさむみかはせにうかぶみづのあはの きえあへぬほどにこほりしにけり〔五七〕

氷をよめる

303 をとはやま山おろしふきてあふさかの せきのをがはくこほりわたれり

月前嵐

304 ふけにけりとやまのあらしさえく〔五七〕 て とをちのさとにすめる月かげ

湖上冬月といふ事を

305 ひらのやま山かぜさむみからさきや〔五七〕 にほのみづうみに月ぞこほれる

池上冬月

306 はらのいけのあしまのつらゝしげゝれど たえぐ月のかげはすみけり

冬哥

307 あしのはゝさはべもさやにをくしもの さむきよなくこほりしにけり
308 なにはがたあしのはしろくをくしもの さえたるよはにたづぞなくなる

よふけて月をみてよめる

309 さよふけてくもまの月のかげ見れば そでにしられぬしもぞをきける

社頭霜

310 さよふけていなりのみやのすぎのはに しろくもしものをきにけるかな

屏風にみわのやまに雪のふれる所」 632

311 ふゆごもりそれとも見えずみわの山 すぎのはしろくゆきのふれゝば

社頭雪

312 みくまのゝなぎのはしだりふるゆきは 神のかけたるしでにぞあるらし

鶴岡別當僧都許に雪のふれりし

あしたよみてつかはすうた

313 つるのをかあふぎて見ればみねのまつ こそゑはるかに雪ぞつもれる」

314 やはた山こだかきまつにゐるたづのはねしろたへにみゆきふるらし

海邊鶴

315 なにはがたしほひにたてるあしたづのはねしろたへにゆきはふりつゝ

冬哥

316 ふりつもるゆきふむいそのはまちどり なみにしほれてよはになくなり」42

317 みさごゐるいそべにたてるむろの木のはだもとおゝにゆきぞつもれる

318 ゆふさればしほかせさむしなみまより 見ゆるこじまに雪はふりつゝ

319 たちのほるけふりはなをぞつれもなき ゆきのあしたのしほがまのうら

雪をよめる

320 ながむればさびしくもあるかけぶりたつ」むろのやしまのゆきのしたもえ

冬哥

321 ゆふさればうらかせさむしあまを舟 とませの山にみゆきふるらし

322 まきもくのひはらのあらしさえくて ゆつきがたけにゆきふりにけり

323 みやまにはしら雪ふれりしがらきの まきのそまみちたどるらし」(56)

324 はらへたゞゆきわけごろもぬきをうすみ つもればさむし山おろしのかぜ

325 まきのとをあざあけのくもの衣でに ゆきをふきまく山おろしのかぜ

326 やまぎとは冬こそことにわびしけれ ゆきふみわけてとふ人もなし

327 わがいほはよしのゝおくのふゆごもり 雪ふりつみてとふ人もなし」

328 おく山のいはねにおふるすがのねの ねもころゝにふれるしらゆき

329 をのづからさびしくもあるかやまふかみ こけのいほりのゆきのゆふぐれ

寺邊夕雪

330 うちつけに物ぞかなしきはつせ山 おのへのかねの」(56)

331 ふるざとはうらさびしともなきものを よしのゝおくの

冬哥

332 ゆふさればすぐふくあらし身にしみて よしのゝたけにみゆきふるらし

333 やまたかみあけはなれゆくよこぐもの たえまに見ゆるみねのしらゆき」

334 見わたせばくもるはるかに雪しろし ふじのたかねのあけぼのゝそら

335 さゝのはゝみやまもそよにあられふり さむきしもよをひとりかもねむ

山邊霰

336 くもふかきみやまのあらしさえくゝて いこまのたけにあられふるらし」命

雪をよめる

337 はしたかもけふやしらふにかはるらん とかへる山にゆきのふれゝば

冬哥

338 ゆきふりてけふともしらぬおく山に すみやくおきなあはれはかなみ

339 すみがまのけぶりもさびしおほはらや ふりにしさとのゆきのゆふぐれ」

340 わがゝどのいた井のしみづふゆふかみ かげこそみえねこほりすらしも

341 ふゆふかみこほりやいたくとぢつらし かげこそ見えね山の井のみづ

342 冬ふかみこほりにとづるやまがはの くむ人なしみとしやくれなむ

343 ものゝふのやそうぢがはをゆく水の ながれてはやきとしのくれかな」命

344 しらゆきのふるのやまなるすぎむらの すぐるほどなきとしのくれかな

345 かづらきや山をこだかみゆきしろし あはれとぞ思としのくれぬる

仏名心をよめる

346 身につもるつみやいかなるつみならん けふゝるゆきとゝもにけなくむ

歳暮

347 おいらくのかしらのゆきをとゞめをきて はかなのとしやくれてゆくらむ

348 とりもあへずはかなくゝれてゆくとしを しばしとゞめむせきもりもがな

349 ちぶさすふまだいとけなきみどりごと ともになきぬるとしのくれかな

350 ちりをだにすゑじとやおもふゆくとしの「あじ」 あとなきにはをばらふまつかせ

351 うばたまのこのよなあけそしばくも まだふるとしのうちぞとおもはん

352 はかなくてこよひあけなばゆくとしの おもひいでもなき春にやあはなむ

賀

353 ちゞのはるよろづの秋にながらへて 花と月とをきみぞ見るべき

354 おとこ山神にぞぬきをたむけつる やをよろづよもきみがまにく

まつによするといふことをよめる

355 やはた山こだかきまつのたねしあらば〔61〕 ちとせのゝちもたえじとぞ思

356 くらゐやまこだかくならむまつにのみ やをよろづよと春風ぞふく

357 ゆくすゑもかぎりはしらずゝみよしの まつにいくよのとしかへぬらむ

358 すみよしのおふてふまつのえだしげみ はごとにちよのかずぞこもれる

359 きみがよは猶しもつきじすみよしの まつはもゝたびおひかはるとも〔62〕

祝の心を

360 たづのゐるながらのはまのはまかせに よろづよかけてなみぞよすなる

361 ひめしまのこまつがうれにゐるたづの ちとせふれどもとしおひずけり

大嘗会の年の哥

362 くらもて君がつくれるやどなれば よろづよふともふりずもありなむ〔63〕

むめの花をかめにさせるを見てよめる

363 たまただれのこがめにさせるむめの花 よろづよふべきかざしなりけり

花のさけるを見て

364 やどにあるさくらはなはさきにけり ちとせのはるもつねかくし見む

こけによするいはひといふことを

365 いはにむすこけのみどりのふかきいろを「いくちよまでにとたれかそめけむ

二所詣し侍し時

366 ちはやぶるいづのを山のたまつばき やをよろづよもいろはかはらじ

月によするいはひ

367 よろづよに見るともあかじなが月の ありあけの月のあらむかぎりは

河邊月」(22)

368 ちはやぶるみたらしがはのそきよみ のどかに月のかげはすみけり

いはひのうた

369 きみがよもわが世もつきじいしかはや せみのをがはのたえじとおもへば

370 朝にありてわがよはつきじあまのとや いづる月日のてらむかぎりは「